

「第4回水資源に関するシンポジウム」の開催、参加者の募集

昭和52年10月に第1回、昭和57年8月に第2回、更に昭和62年8月に第3回の「水資源に関するシンポジウム」が開催され、関連する学会、行政機関及び団体等が参集し、我が国の水資源に関する分野の研究及び行政の進展に多大の成果を収めました。

第3回の水資源に関するシンポジウムを開催して以後、5カ年が経過しましたが、経済社会が高度化する中で、量のみならず質的にもより一層安定した水資源の確保が求められています。また、一方で水資源の持つ多様な価値が再認識され、様々な分野でその活用が進められています。

そこで、水資源の利用、開発及び保全に関する様々な問題について、学会、行政のそれぞれが、最新の研究成果、情報を持ち寄り、幅広い検討を行うことにより、今後の水資源に関する学術研究の進歩と今後の水資源行政の的確な展開に資するとともに、水資源問題に対する国民の理解と認識を一層深めることを目的として、下記により第4回の「水資源に関するシンポジウム」を開催することになりましたので、多数ご参加下さいようお願い申し上げます。

記

1. 会議の名称：第4回水資源に関するシンポジウム
2. 主催：日本学術会議水資源学研究所連絡委員会、空気調和・衛生工学会、土木学会農業土木学会、日本気象学会、日本地下水学会、日本林学会、砂防学会、水文・水資源学会、水の週間実行委員会
3. 後援：厚生省、農林水産省、林野庁、通商産業省、資源エネルギー庁、気象庁、建設省、科学技術庁、環境庁、国土庁、水資源開発公団、地域振興整備公団、住宅・都市整備公団、日本下水道事業団
4. 会期：1992年8月3日(月)、4日(火)の2日間
5. 会場：日本学術会議(講堂・会議室)
〒100 東京都港区六本木七丁目22番34号
交通機関：営団地下鉄・千代田線「乃木坂駅」下車・徒歩1分

6. 会議の構成：(1)一般応募論文の発表約130編

- ①水資源の活用/a. 水需要の動向, b. 水の有効利用, c. 水エネルギーの有効利用, d. 克雪, 利雪
- ②水資源の開発と安定供給/a. 水資源の開発及び供給計画, b. 水管理と制御, c. 渇水対策, d. 地下水の保全と利用, e. 水源地域対策, f. 水制度
- ③水資源の保全と環境/a. 水環境の保全, b. 流域の管理と水資源の保全, c. 地域における水の多面的機能, d. 水景観の創造
- ④地球環境の変化と水資源/a. 気候変動と水資源, b. 酸性雨と水資源, c. モニタリング

(2)主催8学会代表論文の発表

(3)特別講演

- ①Erich J. Platc (ドイツ, カールスルーエ大学水文・水資源学研究所長, 国際学術連合会議・水研究委員会議長)
- ②何 環 (中国, 水利部総工師)

(4)パネルディスカッション

『全体の詳細なプログラムは7月上旬に参加申込みの方へお送りいたします』

7. 参加費：4,000円(前刷集代を含む)

8. 懇親会：シンポジウム第1日目(8月3日(月))18時00分より、懇親会を下記により開催いたしますので、参加希望の方はシンポジウム参加申込と同時に申し込下さい。

- (1)日時：8月3日(月)18時00分～20時00分
- (2)会場：「健保会館」シンポジウム会場より徒歩5～6分
- (3)参加費：4,000円

9. 申込方法：(1)シンポジウムの申込方法

参加希望の方は、氏名、勤務先、住所(連絡先住所)及び「第4回水資源に関するシンポジウム参加申込」と明記の上、7月10日(金)までに参加費用4,000円を添えて下記宛「現金書留」でお申込下さい(定員があります、満員になり

次第締切といたしますのでお早めにお申込下さい。

(2)「懇親会」の申込方法

シンポジウム参加申込(参加費4,000円)と同時に、懇親会参加費(4,000円)の合計8,000円を添えて下記宛「現金書留」でお申込

下さい。

参加申込先: ☎100 東京都新宿区四谷一丁目無番地
社団法人 土木学会内
第4回水資源に関するシンポジウム事務局
電話 03-3355-3441, 内線 162
Fax. 03-5379-0125



真木太一・鈴木義則・嶋田福也・
早川誠而・泊 功編著

「農業気象災害と対策」

養賢堂発行, 1991年,
345頁/4,738円
(本体 4,600円)

人類の歴史の中で、食糧の安定供給が、生命の維持に必須であったことは勿論であるが、今般、日本農業気象学会の第一線の研究者が農業気象災害全般とその対策を刊行され、積極的に取り組まれるようになったことは意義深い。この出版は、学際的事項を含みまとめたものである。これに関して1992年ブラジルで環境に関する国際会議が開かれることもあって、このような好著の刊行は時宜を得たものである。類書としては、内嶋善兵衛氏の「ゆらぐ地球環境」(1990)、谷山鉄郎氏の「地球環境保全概論」(1991)。がある。

そもそも、地球的規模から考えると、ユーラシヤ大陸の東岸に位置する日本は、特に日射、温度、風、雨の面で、かなり変化に富むので、水と光の自然の恵みの中で育つ農作物は影響を受け、その変化の対策は必要となる。

内容は、第一章では、総論に相当する災害の定義と関

連する諸問題、ならびに、防止対策概要を論じ、第二章は、各論、第三章は、異常気象の動向、第四章は、現在の環境問題を述べている。

しかし、優秀な研究者の著述であるから、個々の災害の諸問題を経験的、行政的に羅列するだけでなく、災害の生物的、物理的な支配原理と思索哲学及び災害支配原理の仮説と実況の比較検討の態度をも論じ、科学的主張をして欲しいと思うのは、本書は、気象災害の基本的著述と考えるからだろうか。更に欲を云えば、天気予報(特に長期予報)論にふれて欲しかった。又、編集長が苦勞し大事な図版であると思うが、23頁の図I-8は、158頁図IV-57と全く同一であるので、紙面節約上削除してもよいのではないか。

以上本書を読んでの印象であるが、本書は先端的な好著であるばかりでなく、気象学を学際的な面を含め、広く理解しようと志す方は、これを一つの手本とする立派な価値がある。現今の地球環境変化が叫ばれる時代を迎えては、非常に大切な解説書である。これを土台にして、自然環境を更によく理解し、この方面の研究者が一層、増加し発展することを切望する。

いろいろと批判めいたことを申しましたが最先端の優秀な研究者や実地関係の方々、是非一読をされることを積極的にお勧めします。(九州大学 坂上 務)